

氏 名 (本籍)	狩 ^か 野 ^の 宏 ^{ひろ} 明 ^{あき} (山 形 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5445 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	絵画における空間表現についての研究 ークアトロチェント・イタリア絵画における空間表現の複合性とその応用の可能性についてのー考察ー		
主 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	齊 藤 泰 嘉
副 査	筑波大学教授		玉 川 信 一
副 査	筑波大学准教授	博士 (芸術学)	仏 山 輝 美
副 査	筑波大学准教授	博士 (芸術学)	石 崎 和 宏

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

クアトロチェント・イタリア絵画 (1400 年代のイタリア絵画) は、線遠近法に基づく空間表現を取り入れる一方で、異なる視点による複数の場景を同一画面上に構成し、より自由で複合的な絵画空間を構築している。本論の目的は、制作者の立場からこの複合的な空間表現のメカニズムと具体的な手法について明らかにし、さらに制作実践による検証を行った上で、その成果を絵画表現のための制作方法論として提案することである。

(対象と方法)

ピエール・フランカステル (Pierre Francastel 1900 - 1970) の『絵画と社会』を基本文献とし、そこに述べられたクアトロチェント・イタリア絵画の特性に関する指摘を礎に考察を展開している。フランカステルは、「面の分離体系」と「ヴェドゥータ (veduta)」をクアトロチェント・イタリア絵画において確立された重要な空間表現の手法であるとしている。クアトロチェントの画家たちが線遠近法による「立方体的閉鎖空間の概念」に満足せず、「解放空間の概念」を表現するために、これらの手法を導入し確立したとフランカステルは指摘する。著者は、この見解の上に一連の考察と実践を展開している。

第 1 章においては、線遠近法が確立される以前に絵画空間はどのような手法によって表わされていたのかについて考察している。主に、ジョット (Giotto di Bondone 1266 頃 - 1337) のスクロペーニ礼拝堂壁画を対象に、中世的な約束事に基づく二次元的な構成を脱した三次元的な空間表現について分析を行っている。

第 2 章においては、フィリッポ・ブルネレスキ (Filippo Brunelleschi 1377 - 1446) の実験、レオン・バティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti 1404 - 1472) の『絵画論』、ジョージ・R・カーノードル (George R Kernodle 1907 -) の『ルネサンス劇場の誕生 演劇の図像学』を中心に、線遠近法の理論と実践について考察している。線遠近法によってもたらされる三次元的奥行き性の性質について確認し、クアトロチェントの画家たちがどのように線遠近法に向き合い、それを空間表現の手法としていかに取り入れていったのかについて論述している。

第3章においては、フラ・アンジェリコ (Fra Angelico 1387/1400 - 1455)、マンテーニャ (Andrea Mantegna 1431 - 1506)、ギルランダイオ (Domenico Ghirlandaio 1449 - 1494) 等、クアトロチェント期の壁画にみる空間表現の分析を踏まえて、複合的な空間表現を形成するクアトロチェント・イタリア絵画の空間構造とその具体的な手法について考察している。

第4章においては、過去5年間の著者作品について、「面の分離体系」と「ヴェドゥータ」による空間表現の手法を援用したことに伴う表現内容・方法の変遷を分析している。

(結果)

ゴシック絵画から継承された画面分割の手法が、クアトロチェント・イタリア絵画においては「面の分離体系」としてより洗練されて用いられ、「ヴェドゥータ」とともに、主題に即して自在に事物を配置し空間を構成する様式として展開していったことを確認している。また、線遠近法を空間表現の一手法として採用し、「面の分離体系」や「ヴェドゥータ」とともに併用するクアトロチェント・イタリア絵画の具体的な手法について明らかにしている。

制作実践においては、「面の分離体系」や「ヴェドゥータ」の各面（各事物、各場面）の非連続性に着目し、異なる視点から捉えた複数の面を重ねて自在な画面構成を試みている。一連の取り組みの中でクアトロチェント・イタリア絵画にみる空間表現の手法の有用性を検証し、画面構成のためのより実践的な制作方法論として提案している。

(考察)

著者によれば、クアトロチェント・イタリア絵画にみる「面の分離体系」や「ヴェドゥータ」の特質は、体系的な構造による明確さと、部分と部分の連関によって全体を自在に形成する柔軟さである。明確さと柔軟さが両立した絵画空間の構造がクアトロチェント・イタリア絵画の最大の魅力であるとしている。著者は最後に、今後の展望の中で、現代に生きる我々にとって世界は断片的なイメージの集合体によつて形成されていることに触れ、本論で明らかになったクアトロチェント・イタリア絵画における空間表現の手法と現代における絵画表現との接点を探っている。そして、造形としての絵画を明確な構造と体系によって構築しつつ、断片的ではあるが多様なイメージを柔軟かつ自在に構成する手法にたどりついた自作作品の成果は、クアトロチェント・イタリア絵画における複合的な空間表現の構造が現代においても有用な表現様式の一つとして活用し得ることを示しているとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論の考察は、研究の対象となるクアトロチェント・イタリア絵画作品の実見調査を実施した上で、それぞれにみる空間表現の構造について制作者の視点で分析を行っている。先行研究を踏まえ、著者独自の分析と考察を加えて、クアトロチェント・イタリア絵画における空間表現の手法とその表現効果を明らかにしている。さらには、考察の成果を著者自らの作品において検証し、実践を通じてより具体的で有用な空間表現の様式理論を獲得している。「面の分離体系」や「ヴェドゥータ」の様式が認められる絵画作品は多く存在するが、その形式を学術的に分析し、体系的にまとめて制作方法論を提案しさらに作品への応用を実践した研究は見当たらない。得られた理論は汎用性が高く、多くの画家にとって制作実践の指針となり得ることはもとより、さらに制作理論の学術進展に寄与するものと期待できる。また、著者の作品が対外的な高い評価を継続的に得ているという事実が、本論の考察で得られた一連の制作理論の効用を裏付けているともいえる。著者は本論の最後に、クアトロチェント・イタリア絵画にみる「面の分離体系」が現代の世界観に通ずるものであることを指摘しており、今後の展開として、表現のコンセプトとしての現代性と密接に関係づけられた「面の分離体系」の活用とそれに伴う表現内容・方法の更新が期待できる。

論文審査および最終試験の結果、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。